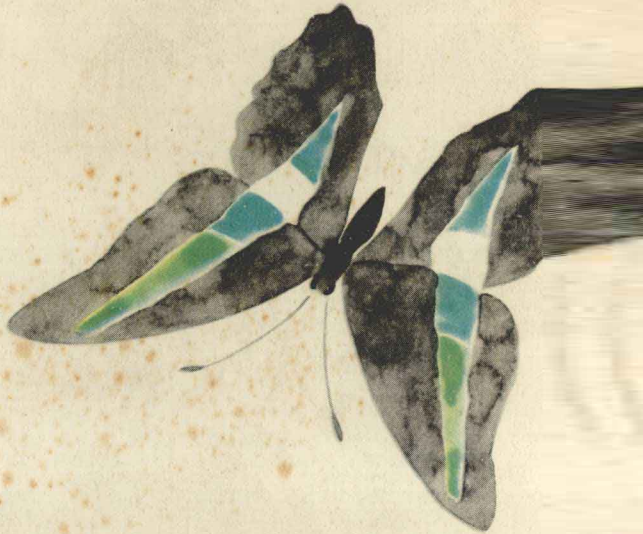
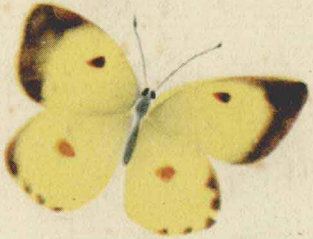
隨筆　續　女ひと





室生犀星著

隨筆

續女ひと

室生犀星

隨筆續女ひと

定價 百八十圓
地方賣價 百九十圓

昭和三十一年三月十一日發行
昭和三十一年三月十五日印刷

著者 室生犀星
發行者 佐藤亮一 東京都新宿區矢來町七一
印刷者 塚田重 東京都千代田區神田神保町三ノ二三
發行所 株式會社 新潮社 東京都新宿區矢來町七一 電話東京三四局代表七一一一—八 振替東京八〇八番

（亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします）

印刷 塚田印刷株式會社 製本 神田加藤製本所

Printed in Japan

續女ひと序

本集にある「女ひとだち」と「をみなごにおくる」詩の數十章は、先著「女ひと」に編入される筈の作品であつたが、頁がふえるために更めてこんど續篇として上梓したものである。これらの詩の柔かさはこれを詩と呼んでいいか、詩になる前の頬や手にある肉つきと言つたらいいか、ともあれ六號二段に組んで隨筆なみのあしらひをして見たが、およそ六號活字の美しいこまかさは、つくづく私の眼鏡のなかで、こまかい蟲の顔のやうにみんな生きて見えた。私の永い文學生活のはじまりは凡てこの六號活字で刷られた十六七歳頃の詩文から始まり、昔、恥かしくも文章に刷られた六號活字がいかに今になると纖細であつて、粉つぽく摘めばたちまちに零れる山野の花にも類はれて、消茫として美しいものの限りである。これらは或いは詩といふより未だ書かれざる小說隨筆の幾百枚かの中から、そつとその何行かを先きに剝ぎ取つて、玆に象眼したやうな敍情風なものである。

「文士の悲しみ」は私の文學感想の幾章かを列ねたもので、文士といふものはいかなる大家でも、最後まで產毛を慄はせてゐるやうに、自分の仕事にあんしんしてゐられないものである。詩文世に行はれざるの時代を思はぬ文士は一人もゐないし、そのことでかれらの仕事が日として成就なされざるはないのである。先著はさいはひに多くの人の眼にとまり識者の批判を受け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

たが、これは私としては稀有のことがらであつた。讀む人はつねに遙かであつて作者はすぐにその眼に、常に向きあふことが出來ないのである。

本集に山口蓬春氏に二羽の蝶をかいていただいた。

隨筆續女ひと目次

女ひとだち

女ひと世界　一三
人生は飯事遊びから　一四
じやんけんぽん　三三
博士と理髪士　二七
悲願ノ人　三三
梅が咲いて　三四
映畫の正體　四三
紫の雲　四六
女言葉集　五三
無縫の人　五六
靴音　六三
美女達　六六
批評家　六八
鶯の谷渡り　七二
さすらひ人　七四
呼名　七七
アイ子　出目金　妹　愛妾　一〇三
半分づつのいのち　一〇四
藤村とお千代さん　一〇七
音樂の先生　一〇七

女ごのための最後の詩集　一〇九
序　一一〇
女ごのための最後の詩集　一一三
けふといふ日　とらへられざる
ままに　けふほれてあすわかれ
みなあれから　受話器のそばで
告別式　ひとりづつがべつにつ
くられ　では　さういふことに
こまかく粧る　野をうしろにい
ろどつて　こひびと達に代つて
沙漠もある　たまゆらびと
重い荷のひと　警告　知らず
にわかれた人びと　ふたたび美
人への警告　わかい齒といふも
の　わらひといふもの　紅梅
の木　たそがれびとと幽谷
くれるかほ　硝子の家　よこ
がほ　手紙　日沒　いまも
なほ　人の手に　見失ふ
帆は白く　或るひとの時間
禮儀　野草

亞麻色　二三七
誰かをさがすために　野も山も
あぢのない黄金　ロメオとジュ
リエット　思慮深くよこを向く
好きならしかたがない　その男
は誰だらう　舌　蜜柑　亞
麻いろの　めぐりあひ　有名
と私生兒　俠盜詩傳　わたく
しより先に
また秋ぐさに　二三五
ちぶさ　令孃ミンミン　呼び
ごゑ　横死　バカ　百合
背中　病中　あさぐさに
夕日賑ふ　知らざる人　奉る
信濃の宿
文士の悲しみ　二四一
文士の悲しみ　二四三
うきぐさ　二四五
原稿料といふ化物　二四八
薔薇にはこやしを　二五一
文學のサギ師　二五四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

日なたぼつこの座　一五八
あとは野となれ　一六一
古　雛　一六四
編集者と作家の間　一六七
急行列車の批評家　一七〇
日の丸の旗　一七三
書かれざる日記　一七六
作家は一生が青春時代　一八〇
暗い世の中　一八三
煙草の悪魔　一八七
老心理先生　一九五
鮒と大臣　一九八
作家の晩年　二〇三
或るあはれ　二一〇
冬　柿　二一四
樹木の悲しみ　二一七
白秋をおもふ記　二三〇

裝幀　山口蓬春

隨筆　續　女ひと

女ひとだち

女ひと世界

君は一體幾つになる、さう、僕はことしで六十六になる、それは滿でいふのか普通のかぞへ年でいふのか、面倒なことをいふね、舊式の算へ方で六十六になる、そしてその生涯の間で何が一等氣になり不愉快であつたか、たとへば何時でも心に引つかかり常に君を厭がらせてゐたものは何か、さうだね、僕の生涯でどうにも始末のつきかねたもので、變らせようにも變らせられないものがあつた。

其奴は何處にも乘場はないし何時でもちやんと乘つけてゐなければならないし、そのくせ年ぢゆう手入れのとどくかぎりの手入れをしなければならないものだがね、どんなに手入れをしてゐてもその物は氣にいることは先づないな、それがだね、ひよんな時にふいにたとへば宴會などのはばかりの化粧鏡や、何處か廊下の硝子窓の硝子などに映つて、ちよつとの間見つめてゐるとつくづく厭になる、こんな顏付をしてたとへ偉さうなことを言つても、その半分の言分も顏のために達せられないやうな氣がしてゐたね。

顏立の出來た人はちよつと冗らないことを言つても、大して冗らないやうな氣もしないが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong